

障害者の「困難」想像して



新型コロナウイルスの感染対策の影響で、障害者が様々な困難に直面している。マスクで口の動きが見えず、話の内容がわからなかったり、目が見えないために他人と距離を取れなかったりと、健常者が気づきにくい困難も多い。専門家は、感染対策と同時に、障害者への配慮が必要だと訴える。(福島憲佑)

障害者の社会参加を支援する一般社団法人「ダイアローグ・ジャパン・ソサエティ」(東京) スタッフの●さん(●)は耳が不自由だ。5月下旬にタクシーに乗った時、行き先の病院名や耳が不自由なことを書いた紙を運転手に手渡した。赤信号で止

まった時、運転手が振り向いた。以前は口の動きや表情を見て話の内容の見当がついたが、運転手はマスクを着けているために口の動きも表情も見えない。何を話しているかわからないまま病院に着いた。病院職員もマスクで口の動きが見えず、自分の名前が呼ばれてもわかりそうにない。●さんはマスクを着けた人とどうやってコミュニケーションを取っていけばいいのか……と不安を募らせている。

「マスク」「距離」が阻む社会参加

◆新型コロナウイルスのために障害者が困っていること

- 1人で外出した際に手助けを頼みにくい
- 弱視のため、商品を持って目に近づけない。棚には戻す時、周りの人は不快だろうと思う
- 自治体などの相談窓口は電話が中心。メールやLINEでも対応してほしい



感染防止のため、国や自治体は、マスク着用のほか、スパーなどで混雑の緩和や、人と人の距離を確保する「ソーシャル・ディスタンス」などを求めている。同法人が4月下旬、障害者約1700人にアンケートを行うと、7割が生活に不便さを感じていた。視覚障害者から

生活に不便 7割

ダイアローグ・ジャパン・ソサエティのアンケート結果を基に作成

は「スパーの入場制限の貼り紙が見えない」「ソーシャル・ディスタンスができない」と、障害者のために戸惑う声が寄せられている。

◆ 発達障害がある人も大きな影響を受けている。

東京都のパート女性(58)の次男26は自閉スペクトラム症だ。社会福祉法人の作業所に通っているが、4月中旬から5月末まで、感染防止のために利用を見合わせた。だが、次男は生活パターンの変更が苦痛なため、以前と同じ時間に作業所に行き、判子を押してようやく帰宅した。

夕方や休日に通う図書館が休館している理由を理解できず、いらいらを募らせたことも。女性は「図書館に連れて行き、休館しているのを見せれば納得させるしかなかった」と振り返る。

事情を説明 支援の企業も

困難を取り除こうと取り組む企業もある。

損害保険大手「SOMPO Oホールディングス」が、障害者の働き場所として設立した特の子会社「SOMPOチャレンジ」(東京)では、精神障害者の約60人が、正社員として、保険の申込書のデータ化などを行

在宅ワーク中に、職場でのアドバイスの方法をeラーニングで学ぶ社員(SOMPOチャレンジ提供)

受けるようにした。担当者は「新型コロナで社会が変わっているが、障害者が取り残されないようにしたい」と話している。

東京大学大学院教育学研究科付属バリアフリー教育開発研究センター准教授の●さんは、「コロナの感染対策が進み、一層制約されるようになった障害者の生活について、一般の人は想像力を働かせてほしい」と求めている。また、「国が呼びかける『新しい生活様式』を前提とする行政の施策や企業のビジネスモデルは、障害者の存在を考慮したものでなければならぬ」と、障害者でも生活しやすい社会の大切さを訴えた。

